

# 正 信 偈

きみょうむりょうじゆにょらい  
帰命無量寿如来

永遠の仏よ あなたの呼び声に私は目覚め 量りしれない寿に立ち帰り

なむふかしぎこう  
南無不可思議光

思い はかれない光に 敬いを捧げます。

ほうざうぼさいんにじ  
法蔵菩薩因位時

法蔵菩薩 それは昔 国と王位をすてて道を求めておられたころの

ざいせいざいおうぶっしよ  
在世自在王仏所

あなたの名 あなたは 世自在王仏という師におつかえし

とけんしよぶじょうどいん  
観見諸仏浄土因

仏たちの世界の成り立ちと

こくどにんでんしぜんま  
国土人天之善悪

国と人とのありさまを見きわめて

こんりゅうむじょうしゅうがん  
建立無上殊勝願

みずから浄らかな国土を建てようという すばらしい願いを打ち立て

ちやうほけうだいくぜい  
超発希有大弘誓

あらゆるいのちあるものと共に生きようというかつてない誓いをおこされました。

ごこうしゆいししゅうじゆ  
五劫思惟之撰受

はるかに長い時間をかけて 思いを深め 数多くの願いを運びとり そのころをみずからの名のりに  
おさめ

じゅうせいみょうしやうもんじゅうほう  
重誓名声聞十方

どうか 私の名と そのいわれを よく聞きわけてくださいと 願い成就の誓いをこめて十方の世界に  
呼びかけました。

ふ ほうむりょうむへんこう  
普放無量無辺光

あなたの名は 世にあまねく 光を放ち はかりなく はてしなく

む げむたいこうえんのう  
無碍無对光炎王

さまたげなく ならびなく 炎のように燃え

しやうじやうかんぎちえこう  
清浄歡喜智慧光

清らかさ よろこび 深い智慧を輝かせ

ふだんなんしむしやうこう  
不断難思無称光

たえることなく 思いや言葉では尽くせない光は

ちやうにちがっこうしやうじんせ  
超日月光照塵刹

日月よりも明るく 世のすみずみを照らし

いっさいくんじやうむこうしやう  
一切群生蒙光照

あらゆるいのちがその光の恵みにあずかるのです。

ほんがんにんごうしやうじやうどう  
本願名号正定業

こうしてあなたは 願いの国 浄土の永遠の仏 阿弥陀仏と成られ その名のりは南無阿弥陀仏とい  
う 真実の言葉となり その言葉は人が生きて往く方向を

しんしんしんぎやうがんにいん  
至心信樂願為因

正しく定めるしごとをしています。あなたのまごころは いのちの根源にはたらきかけ 私に まことのころ  
を おこさせます。

じやうとうがくしやうだいはん  
成等覚証大涅槃

私が生きていることの意味に目覚めて さとることができるとしたら

ひっしめつどがんにじやうじゆ  
必至滅度願成就

それは、〈必ずざとりに至らせる〉というあなたの願いが成就しているからなのです。

にょらいしよいこうしゅっせ  
如来所以興出世

思えば 釈迦如来が この世に出てくださったのは

ゆいせみだほんがんに  
唯説弥陀本願海

ただひとえに 海のように深く広い あなたの願いを説くためでありました。

ごじよくあくじくんじょうかい  
五濁悪時群生海

濁った世界 悪い時代に生き 苦しみの海におぼれている いのちあるものは

おうしんにょらいによじつごん  
応信如来如実言

仏のまことの言葉を信じるべきなのです。

のうほついちねんきあいしん  
能発一念喜愛心

信じ 喜び 愛する心が ひとたびおこる時

ふだんぼんのうとくねほん  
不断煩惱得涅槃

煩いや悩みを断たなくても 仏のさとりを得ることができるのです。

ぼんしやうぎやくほうさいえにゅう  
凡聖逆誘奔廻入

凡人も 聖者も 逆らう人も けなす人も ひとたび心を回せば みなひとしく救われるので

にょしやうしにゅうかいいちみ  
如衆水入海一味

あたかも さまざまな水がみんな 大海に入って一つにとけあうようなものです。

せつしゆしんこうじやう  
摂取心光常照護

仏の心は すべてをおさめとってすてない光であり 常に私たちを照らし まもってくださいます。

いのうすいほむみやうあん  
已能雖破無明闇

すでに迷いの闇は破られているのですが

とんないしんぞうしやうんむ  
貪愛瞋憎之雲霧

むさぼり とらわれ いかりにくしみの雲や霧が

じやうふしんじしんじんてん  
常覆真實信心天

常に仏の 眞実の ころの空をおおってしまいます。

ひにょにっこうふやうんむ  
譬如日光覆雲霧

それでも たとえば日光が雲や霧におおわれても

うんむしげみうむあん  
雲霧之下明無闇

その下が明るくて闇にならないように 仏の眞実のころは いつも澄みきっているのです。

ぎやくしんけんきやうだいきやうき  
獲信見敬大慶喜

まことの信をえて いのちの眞実を見て 敬い大きなよろこびに満たされたならば

そくおうちやうぜごあくしゆ  
即横超截五惡趣

その時 迷いの悪道を 願いの力で 横にすみやかにとび超えてたちきるのです。

いっさいぜんまくほんふにん  
一切善悪凡夫人

すべての 善や悪にしばられている人びとが

もんしんにょらいぐぜいがん  
聞信如来弘誓願

仏の願いを聞き 信じるならば

ふつごんこうだいしやうげしや  
仏言広大勝解者

仏はくほんとうによくわかった者>と言われます。

ぜにんみやうふんだりけ  
是人名分陀利華

この人をく分陀利華>と名づけるのです。それは泥に咲いて濁りにそまらない白蓮華です。

みだふほんがんにんぶ  
弥陀仏本願念仏

永遠の仏の願いを信じ 忘れずに名を称える念仏は

じょけんきょうまんあくしゅじょう  
邪見憍慢惡衆生

おごり たかぶり あなどる悪い人たちには

しんぎょうじゅじじんになん  
信樂受持甚以難

そのままの心では とても信じられないことです。

なんちゅうしなんむかし  
難中之難無過斯

信心をおこすことほど難しいことはありません。

いんどさいてんしろんげ  
印度西天之論家

インドなど西のかなたの 龍樹 天親 という仏教思想家

ちゅうかじちいきしこうぞう  
中夏日域之高僧

中国の 曇鸞 道綽 善導 日本の 源信 源空 という名高い僧は

けんだいしうこうせしやうい  
顕大聖興世正意

釈尊がこの世にお生まれになった意義を現し

みょうにょらいほんぜいおうき  
明如来本誓応機

仏の誓いが すべての人びとのおかれた現実にかなう救いであることを 明らかにしていただきました。

しゃかにょらいりょうがせん  
釈迦如来楞伽山

釈迦如来は 楞伽山で説法された時

いしゅうごうみょうなんてんじく  
為衆告命南天竺

聴衆に向かって予告されく南インドに

りゅうじゅだいじしゅつとせ  
龍樹大士出於世

龍樹という大いなる人が現れて

しつうざいほうむけん  
悉能摧破有無見

われなきあと 真理をおおう有と無の思想をことごとく打ちくだく

せんぜだいじゅうむじょうほう  
宣説大乘無上法

彼は自分だけの救いではなく いのちもろともをのせてはこぶ 大きな乗りもののような すばらしい救いの法を説き

しゅうかんぎちしゅうあんらく  
証歡喜地生安樂

みずから身と心によるこびを証して いのち安らぐさとの国にうまれる>と言われました。

けんじなんぎょうろくろく  
顕示難行陸路苦

龍樹菩薩は さとりへの道は二つあると示して 陸路をたった一人で歩く苦しい難行よりも

しんぎょういぎょうしどらう  
信樂易行水道楽

みんなと共に船に乗って楽しく水上を渡る行き易い道があることを示しました。それは仏の願いの船にまかせて 悩みの海を渡り さとりの岸にいたることなのです。

おくねんみだぶほんがん  
憶念弥陀仏本願

だから 仏の願いを忘れず 心に思い念じるならば

じねんそくじにゅうひつじょう  
自然即時入必定

その時 願いのはたらきで おのずから すぐに必ず さとりを約束され 退かない身と定まる

ゆいのうじゅうしゅうにょらいごう  
唯能常称如来号

ただ よく つねに 仏の名を称えて

おうほうだいひくぜいおん  
応報大悲弘誓願

大きな悲願の思恵にこたえていくことが大切である。このようにいわれました。

てんじんぼさざうろんせ  
天親菩薩造論説

天親菩薩は 仏の心を『浄土論』に著して説き

きみょうむげこうにょらい  
歸命無碍光如来

<私は さまたげなき光の仏のいわれをよく聞きわけ 信じて生きています>と表明されました。

えしゅ たら けんしんじ  
依修多羅頭真実

『永遠の寿の経(スートラ)』によって 真実をあらわし

こうせん おうちょう だいせいがん  
光闡横超大誓願

迷いの道をすみやかにとび超える 仏の願いを明らかにされました。

こう ゆ ほんが んりき えこう  
広由本願力回向

そして 仏は 願いの力を広く回らし さし向け

い どく じん せい しょう いっしん  
為度群生彰一心

あらゆるものを救う仏のはたらきを 願いを信じる一心にこめておられることを 知らせています。

きに ゆうく ぶく だい ほう かい  
帰入功德大宝海

仏の恵に満ちた 宝の海のような願いを信ずれば

ひつぎやく に ほう だい えしゅ しょう  
必獲入大会衆数

必ず仏の国で説法に会う聴衆の数に入ります。

どく し れん げ ざう せかい  
得至蓮華蔵世界

蓮華のような世界である仏の国に至りつければ

ぞく しょう しん に ほう しょう しん  
即証真如法性身

すぐに真実のさとりを身にうけて

ゆう ぼんの うりん げん じん ずう  
遊煩惱林現神通

煩惱はげしい生活の中でも いのちの感覚を失わず

にゅう しょう じ おん じ おう げ  
入生死菌示応化

生と死の不安におののく現実の中に入っても まるで 林や園に遊ぶようにたのしく 人と出会い呼びかけ 関わりつづけてゆけるのです。このようにいわれました。

ほん じ どん らん じょう てん し  
本師曇鸞梁天子

曇鸞大師は、梁の時代の国王が

じょう こう らん しょ ぼ さらい  
常向鸞処菩薩礼

常に 菩薩 と敬い 礼拝していた方です。

さん ぞう りゅう じ じょう ぎょう  
三蔵流支授浄教

三蔵法師の菩提流支との出会いによって 永遠の寿を説いた教を授かり

ぼん しょう せん ぎょう きらく ほう  
梵焼仙經帰楽邦

長生不死の迷信を説く仙經を焼きすて 仏の願いの国をよりどころにされました。

てん じん ぼ さろん ちゅう げ  
天親菩薩論註解

天親菩薩の『浄土論』を解き明かし

ほう とう いん が けん せい がん  
報土因果頭誓願

仏に報われた国土の成り立ちや そこに生まれるいわれも すべて願いにもとづく と述べました。

おう げん え とう ゆ たり き  
往還回向由他力

その国へ往くのも その国から還るのも 自力ではなく仏が願いの力を回らし さし向けておられる他力によるのです。

しょう じょう しいん くい しん じん  
正定之因唯信心

真実に生きて往く方向が定まるその原因は ただ 願いを信じる心にあるのです。

わく ぜん ぼん ぶしん じん ぼ  
惑染凡夫信心発

まどいの人 が 信じる心 をおこしたならば

しゅう ち しょう じ ぞく け わん  
証知生死即涅槃

生と死の迷いや不安は そのまま さとり となり人生は無意味ではなかったと気づかされるのです。

ひつ し むりょう こう みょう とう  
必至無量光明土

限りない光の世界を生きるものは 必ず

しょうしゅじょうかいふけ  
諸有衆生皆普化

あらゆる いのち を輝かしていけるのです。このようにいわれました。

どうしやくけつしやうどうなんしやう  
道緯決聖道難証

道緯は 仏教の歴史を深く学び 今や 聖者の道ではさとりえない すてるほかない と決断して

ゆいみやうじやうどかつうにやう  
唯明浄土可通入

ただ仏の願いの国 浄土に生まれる道を 通じてさとりに入るべき門が開かれていると明かしました。

まんぜんじりきへんごんしゆ  
万善自力貶勤修

多くの善を積み 自力の行をつとめてもむだであり

えんまんとうごうかんせんしやう  
円満徳号勸専称

むしろ 願いの徳まどかな 仏の名を ただひたすらに称えよ とすすめます。

さんふさんしんけおんごん  
三不三信諷慇懃

また いつも不信におちいる心のありさまと真実の信のあり方をていねいに教えさとし

ぞうまほうめどうひいん  
像末法滅同悲引

たとえば 仏教の滅ぶような時代になったとしても 仏の心は同じく悲しみ みちびかれると 知らせます。

いっしやうぞうあくちくぜい  
一生造悪値弘誓

一生の間 悪を造った者も、仏の誓いにであえば

しあんにようかいしやうみやうか  
至安養界証妙果

いのち安らぐ世界に至って、証が開かれてきます。このように言われました。

ぜんどうどくみやうふしやうい  
善導独明仏正意

善導よ あなただけが『観経』の教えの中に仏の深い心をさぐりあて明らかにしました。

こうあいじやうさんよぎやくあく  
矜哀定散與逆惡

定や散という修行や善にはげむ善人と 逆らい悪をなす悪人などを 等しく 迷う人と哀しみ

こうみやうみやうごうけんいんねん  
光明名号顕因縁

仏の智恵の光にであい 仏の名を聞き称えるならば それが因縁となって 心をひるがえし 目覚めて  
いく道があることを明らかにされたのです。

かいにやうほんがんだい ちかい  
開入本願大智海

仏の願いの 海のように深い智恵によって

ぎやうじゃしやうじやうこんごうしん  
行者正受金剛心

念仏の行に生きる者は なにもものにも壊されない 金剛の心を 正しく身に受け

きやうきいちねんぞうおうご  
慶喜一念相應後

その よろこびの心が仏の心と一つになった時、

よいだいとうぎやくさんにん  
与韋提等獲三忍

絶望のどん底で釈尊に出会った人 韋提希と同じように 喜びと さとりと 智恵をえて

ぞくしやうほっしやうしじやうらく  
即証法性之常樂

永遠のいのちを生きる楽しみをさとるのです。このようにいわれました。

げんしんこうかいいちだいきやう  
源信広開一代教

源信は 広く仏教を説き明かし

へんきあんにようかんいっさい  
偏帰安養勸一切

ひたすらに すべての人びとに いのち安らぐ世界に 帰れ とすすめました。

せんぞうしやうしんほんせんじん  
専雜執心判淺深

そして 念仏を信じる心について 専ら一つに生きる深い心と あれこれ雑える浅い心を明らかにし  
心の深まりで 願いに報われたまことの浄土に立つか 疑いにおおわれた仮の国土に閉じこもるのか  
行き着く世界がちがう とただしています。

ほうけに どうしやうべんりやう  
報化二土正弁立

ごくじゅうあくにんゆいしゅうふ  
極重悪人唯称仏

極めつけの悪人は ただ 仏の名を称えるがよい。

がやくざい ひせつしゅうちゅう  
我亦在彼撰取中

私もまた 願いの光の中に包んでいただいております

ほんのうしゅうげんすい ふけん  
煩惱障眼雖不見

煩惱が眼をさえぎって 光を見ることができないが

だいひむけんじょうしゅうが  
大悲無倦常照我

それでも 大悲の仏は あくことなく 常に 私を 照らしてくださるのです。このようにいわれたのです。

ほんじげんくわみょうふくきょう  
本師源空明仏教

私のよき師 源空は 仏教は民衆のためにあるのだということ明らかに示され

れんみんぜんまくほんふにん  
憐愍善悪凡夫人

善人も 悪人もふつうの人としてねがいをかけ

しんしゅうきょうしゅうこうへんしゅう  
真宗教証典片州

真実の教を アジアの片はしの島国の この日本に 開きおこされました。

せんじやくほんがんくあくせ  
選擇本願弘悪世

こうして 仏によって選びぬかれた本願は この差別と戦乱にあけくれる悪世に 広められました。

げんらいしゅうじりんでんげ  
還来生死輪轉家

人びとがいつまでも 生と死のなかで どうどうめぐりをして 迷いの家にかえりついてしまうのは

けちぎじょういしよし  
決以疑情為所止

きっと仏の願いを疑っているからにちがいない

そくにゆうじやくじゅうむ いらく  
速入寂靜無為染

すみやかに その家を出て ひそやかな静かなさどりの世界に入るということは

ひつちしんじんいのうにゆう  
必以信心為能入

必ず 信じる心によって よくなしとげられるのです。このようにいわれました。

くきょうだいじしゅうしどう  
弘経大士宗師等

仏の教を広めてこられた 大いなる祖師たちは

じゅうさいむへんごくじよくあく  
拯濟無辺極濁悪

濁りきった 悪い 人の世を救っていただきました。

どうぞくじしゅうくどうしん  
道俗時衆共同心

仏道を行く僧も教を信じ歩む人も 今の時代を生きる者は 共に 心を合わせて

ゆいかしんしこうそうせ  
唯可信斯高僧説

ただ ひたすらに この方々の教を信ずべし。

《現代語意訳 戸次公正氏》

(ルビは第四句目下の読み)